令和元年度第１回　立川市文化振興推進委員会　会議録（要旨）

開催日時	令和元年６月 24 日（月曜日）　午前 10 時～12 時
開催場所	立川市役所 202 会議室
次第	・開会、会議の公開について 1. 委嘱状伝達 2. 正副委員長選任 3. 立川市第４次文化振興計画に関する諮問について 4. 立川市文化振興計画について (1) 立川市第３次文化振興計画について (2) 立川市第４次文化振興計画に向けて 5. その他
配布資料	・立川市文化振興推進委員会委員名簿 ・立川市審議会等会議公開規則 ・施策９　文化芸術の振興（立川市第４次長期基本計画） ・立川市第３次文化振興計画の概要 ・立川市第３次文化振興計画成果指標 ・第３次文化振興計画　今年度の主な取り組み状況 ・立川市第４次文化振興計画策定スケジュール（案） ・諮問書（複写） ・第３次文化振興計画（冊子） ・平成 29 年３月 24 日～31 年３月 23 日立川市文化振興推進委員会（冊子）
出席者	［委員］ 今井良朗、高木誠、田ヶ谷省三、玉川宗則、堀江けんいち、 槙島藍、宮田龍之介、矢内はな恵、吉成順、綿引康司 ［事務局］ 産業文化スポーツ部長　矢ノ口美穂、地域文化課長　比留間幸広、 地域文化振興財団事務局長　加登義哉、地域文化課文化振興係長　柳澤彰子、地域文化振興財団文化事業係長　足立香織、地域文化課主査・市史編さん　小川始、地域文化課文化振興係　田中準
公開及び非公開	公開
傍聴者数	０人
会議結果	・今後、スケジュールに基づき、第４次文化振興計画について意見交換を行っていく。 ・次回の会議は、９月ごろを予定。
担当	産業文化スポーツ部地域文化課文化振興係 電話　042 - 506 - 0012

■会議内容（要旨）

・開会、会議の公開について

・会議に先立ち事務局より、文化振興推進委員会の会議は「立川市審議会等会議公開規則」に基づき公開となる旨、説明があった。

［会議の公開について］

この会議は、基本的に個人情報等を扱うものではないので公開となる。会議の傍聴にあたっては、定員を５名とし、傍聴席を設け資料も用意する。議事録は、「会議概要」をホームページと庁舎３階の市政情報コーナーで公開する。その際、各委員の名前は、委員長と副委員長を除き、発言順に「Ａ委員、Ｂ委員…」という表記とする。公開前に「会議概要」の内容をご確認いただく。

1. 委嘱状伝達

・今期の文化振興推進委員会発足にあたり、産業文化スポーツ部長より、委嘱状の伝達とあいさつがあった。

［部長あいさつ］

今年度は第４次文化振興計画を策定するという大事な時期である。また来年度には文化の祭典でもあるオリンピック・パラリンピックが開催される。この機会に益々立川市の文化振興に努めてほしいという議会の声も出ている。日ごろより様々な面でご活躍の委員の皆様には、忌憚ないご意見をいただき、新しい計画策定にご協力をお願いしたい。

2. 正副委員長選任

・推薦により、今井委員が全会一致で委員長に指名され、挨拶があった。

［委員長あいさつ］

この委員会には第２次計画の時から６年間関わらせていただいている。今回からまた新たな気持ちで取り組むことができればと思っている。

・推薦により、吉成委員が全会一致で副委員長に指名された。

3. 立川市第４次文化振興計画に関する諮問について

・産業文化スポーツ部長が市長から委員長あて第４次文化振興計画にかかる諮問文を代読した。

4. 立川市文化振興計画について

(1) 立川市第３次文化振興計画について

・地域文化課長より「立川市第３次文化振興計画」の概要と進捗について説明があった。

（委員長）　委員会を進めるにあたって、リラックスして話し合いができるよう、「委員」ではなく「さん」付けで呼び合うことにしたい。

（Ａ委員）　観光や産業などほかの課との連携はあるのか。

（事務局）　産業文化スポーツ部内で連携は取れている。また次回から生涯学習推進センターの職員にも委員会に出席してもらう予定。

（Ａ委員）　文化振興計画はそのような連携のもとに行われるものなのか。

（事務局）　そのとおり。

(2) 立川市第４次文化振興計画に向けて

・地域文化課長より「立川市第４次文化振興計画」の概要について説明があった。

・文化振興推進委員の自己紹介を兼ね、それぞれ日ごろの文化芸術活動について発言があった。また事務局の自己紹介もあった。

（委員長）　第４次文化振興計画に向けて意見をいただきたい。

（Ａ委員）　市民として立川に住んでいて日ごろ感じるのは色々なジャンルのものが存在しており、それが立川の個性になっていると思う。しかしそのようなものを統括的に知る場がない。もし市民がそのような文化資源があることを認識できれば立川市民としての愛着や誇りを持つことにつながるのではないか。またそのように意識させられるよう働きかけなどがあるとよいのでは。

（Ｂ委員）　情報発信の仕事をしていて常々思うことは、インターネット等により情報を得るのが便利になっていている反面、その情報から実際にアクションを起こすことは希薄になってきている。その一方で、例えば、文化芸術のまちづくり協議会主催の市民ライター養成講座の参加者は、講座で出会った人から新しい情報を得てまた別の活動を体験しに行ったりしている。接点を増やし、きっかけを作っていくということが、現在一番強い情報発信であり、口コミにもつながるのではないか。

（Ｃ委員）　アートの情報がバラバラになっている。市報などをよく見ると気づくこともあるが、一般の人がその情報までたどり着くのは難しいのではないか。情報をまとめたりつなげたりする人や場所、コンテンツなどがあればよい。

（委員長）　ホームページやSNSなど活用はされているが、情報の周知ができているかというと必ずしもうまくいっていないものが多い。広めるためには高木委員の話に出ていたような接点を増やし、情報を融合させることが大事である。

今の社会は情報はあふれているが、具体的に確実に受け手につながる方法を考えていかなければならない。

（Ｄ委員）　市史編さんから現在出ている成果物は、よく調べてあるが専門的過ぎて一般の人にはわかりづらい。もう少しわかりやすいものにすれば、市民も親しみやすく市に対しての愛着も沸くのではないか。

また、現在４人に１人が高齢者という中で、いかに若者を取り込んでいくかというのも今後の課題である。そういった点についても今後話し合っていきたいが、計画を作るうえで、会議が５回しかないというのは少なすぎるのではないか。

（事務局）　予算の関係上回数を増やすのは難しい。

（事務局）　市史の成果物については、学術的な裏付けがなされたものを作るという方針上、どうしても一般の方から見るとわかりづらいものになってしまうが、最後に普及版も作成する予定であり、そちらに関しては、中学生の授業など広く使われるようなものにしようと考えている。また、年に２回発行している市史だよりの方は、なるべくわかりやすいものを作るよう心掛けている。

（Ａ委員）　中学の授業などで活用すると出ていたが、教育方面との連携はあるのか。

（事務局）　教育部局である歴史民俗資料館とは展示を行うなど連携はとっている。また中央図書館とも連携を取り、関連図書とタイアップしてもらったり、成果物をいち早く発信してもらったりしている。

（Ａ委員）　そういう親しみやすい形で成果物を活用してもらえると、立川愛が深まってよいと思う。

（事務局）　現在立川の小・中学校の科目には、「立川市民科」という授業がある。教育課程の一環として市の歴史やまち探検、職場体験等を取り入れてあり、かなり体系化されている。

（Ｅ委員）　その教育の中にアートが絡むのもよいと思う。また、まちづくりとアートなどの絡みも一見かけ離れているようだが、一緒に考えることによって内容を柔らかくみせることもできるのでは。

（委員長）　市史編さんも次の段階で何かしらアートとのつながりを持つこともよいのではないか。

（事務局）　刊行物の中には写真集もあり、これについては市民の方と一緒になって作っていくものなので、そこで様々なつながりは持てるのではと思っている。

（Ｄ委員）　立川文学賞の課題に立川市史を絡めて舞台などにすれば、わかりやすくてよいと思う。他の自治体に習いカルタなどにして、「立川市民科」で取り上げるのも面白いと思う。また、ファーレ立川アートなど、立川の文化資源をカルタにするなど親しみやすい形にするのもよい方法である。

（委員長）　いろいろ制約はあるかもしれないが、「仕掛け」を作っていくことは必要。またその「仕掛け」を実践できるか等検討していくのも委員会の流れとして作っていかなければならない。

個人的に音楽と美術が結び付くのは難しいと思っていたが、過去に自分が描いた絵本が自然発生的にオペラや演劇など色々な形になったという事例がある。このような仕掛けを作ることができたら面白いと思う。

（Ｃ委員）　音楽と美術の融合という点で、音楽をかけながらのライブペイントなどはやりやすいと思う。またそのようなイベントを行うと絵の描き方なども見ている人に伝わり、それを見た若い人たちが自分もやってみたいという風になるかもしれないし、世代のつながりもできる。やってみたいと思わせることも大事だと思う。

（H議員）　昔は音楽と美術は密な関係にあった。海外の有名な美術館では総合芸術としてオペラやバレエを行っている。立川市も総合芸術としてミュージシャンや美術家を紹介するような場が必要。また海外では地下鉄の広告は芸術関係以外出せないというところもある。立川市も人が集まる場所に市のイベントや市民のイベントの広告などを打ち出し、ビジュアルとして市民にアピールすることが必要。

6. その他

・次回は 10 月頃を予定。

［副委員長あいさつ］

音楽と美術の融合という点で、オペラやミュージカルなどの既存のジャンルに取らわれず、もっと柔軟な発想をもって何ができるか考えたとき、新たに開けてくるものがあるのではないか。